

第2回精華町子どもの食のあり方懇談会 会議録

名 称	精華町子どもの食のあり方懇談会[第2回]	
開催年月日 開催場所	平成24年10月23日(火) 午後2時00分～午後4時00分 精華町立図書館 1階 集会室 (精華町役場内)	
出席者名	委 員	(出席委員) 大谷貴美子、姫野良隆、曾原肇、北澤智、有城義浩 吉川博文、清水朝江、小田英美、森田理恵、木原國夫
	事務局	(事務局) 太田教育長、永井総括指導主事、竹島学校教育課長、小西担当課長補佐 土井担当係長、下田栄養士
傍聴人	1人	
配布資料	資料1 「精華町小・中学校、近隣中学校の校時表」 資料2 「近隣中学校の給食実施状況」 資料3 「近隣市町村の給食費の状況」 資料4 「都道府県別学校給食実施順位表」 資料5 「精華町学校給食調理施設能力」 参考資料 「中学生の食生活の状況をみてみると…」 (公社) 全国学校栄養士協議会発行 ・委員名簿 ・第1回精華町子どもの食のあり方懇談会 会議録 ・懇談会テーマについて	
議事の概要	1 開会行事(教育長挨拶) 2 議題 (1) 第1回会議録の確認(事務局) (2) 配布資料内容について(事務局) (3) 精華町立小学校の食育の取組と課題について (4) 小・中連携の食育について (5) 中学生の実態について (6) 精華町にふさわしい食のあり方について 3 その他 ・第3回懇談会の開催日時の確認⇒11月26日 4 閉会挨拶	
会議の経過	別紙のとおり	

【第2回 懇談経過】

1. 開会

① 竹島学校教育課長の開会宣言の後、教育長の挨拶を行った。

教育長挨拶内容

本日は足元の悪い中、第2回精華町子どもの食のあり方懇談会にお集まりいただき、ありがとうございます。さて、第1回では、食生活のアンケートなどの資料から小学校の食育についてなど、さまざまな情報の交換をいたしました。本日は第2回目ということで、小中学校での食育の取組を踏まえまして、中学校の給食についてどのようにしていけばよいかを具体的に進めていきたいと思っております。このテーマにつきましては、年内にもう1回開催をし、協議を進め、これからの方向性を見い出していただければと考えております。本日はよろしく願いいたします。

2. 協議

第1回会議記録の確認と配布資料についての説明を事務局から行った。

(会長)

事務局からの報告を踏まえ、各委員からの意見を聞く。

○資料4の給食実施率の中にある完全給食とは、自校方式のようなものだけを表すのか、弁当方式のような子どもたちが配膳しなくてもよいものも含まれているのかわからないので、教えていただきたい。

⇒資料の調査時点である平成22年5月1日現在では、ランチボックス方式も完全給食としてカウントされているが、昨年、文部科学省にランチボックス方式も完全給食にあたるのかと問い合わせしたところ、今後はカウントしない方向で考えているという回答であった。文部科学省はランチボックス方式が給食としての望ましい姿とは考えていないとしているが、あくまでも担当者の意見であり、国としてどのような考えであるかは定かではない状態である。また、ランチボックス方式は自宅からもってくる弁当との選択制であることが多く、ランチボックスの利用率は低い。ランチボックス方式が望ましくないとされる理由について、本来給食とはみんなで同じものを食べ、教師の指導も入るということに給食の意味があるが、その意味をなしていないところで、選択制の方に重点がかかっているのか、ランチボックスという形に重点がかかっているのか、国のはっきりとした判断がまだ我々には伝わっていないというのが現状である。

1. 小学校の食育の取組と課題について

○食育の取組を中心になって進めているのは、栄養教諭や栄養職員である。町内全小学校について指導をしているが、栄養教諭、栄養職員が配置されているのは5校のうち3校なので、この3校の栄養教諭等が配置されていない2校を分担して、年間指導を含めて食育の推進を行っている状況である。精華台小学校の子どもたちは、給食を中心に食について関心をもっている。また、朝食をとらずに登校することが少なく、保護者も熱心に食育に取り組んでおられ、学校でも家庭でもバランスよく食事をしている状況がみられる。また、望ましい食生活、衛生面、食文化等について、小学校1年生でも6年生でも理解できる指導ということで、日常的に担任を中心として関係者と連携をはかりながら指導している。本

校では栄養教諭が給食時間に教室を回って給食指導を行う。また、テーマをもうけ、そのテーマに基づいた食の話などもしている。さらに、その中で給食に対する感想などもこまかく把握し、今後の給食に反映させている。また、子どもたちの健康な体づくりの点から健康安全部、保健体育の方とも連携をとりながら養護教諭とともに食に関する指導をしている。もう一点は、食育は学校だけではできないので、家庭、地域と連携をとることが大事であるが、PTAの中でも献立作りなど食に関わる活動の中では、栄養教諭が講師として話をし、実際にメニュー作りをして家庭にもちかえってもらうという取組をしている。さらに、来年度入学児童、保護者が来られるときには、講演という形をとって食の大切さについて話をする機会も増えてきている。また、精華台小学校は平成16、17、18年度に「子どもの体力向上実践事業」のモデル地区になっており、様々な関係機関と連携をとりながら子どもの体力を上げていくという取組をした。その時にも、子どもたちの体力向上に生かすため食生活の改善をPTAや地域の方々にご協力いただいたこともあり、保護者の方の意識は高いと感じている。基本的には日常的な指導が重要であると考えている。

○小学校では1年生から6年生まで給食を食べることによってどんな食事をするのがよいのかを身につけることができると考え、毎日の給食献立を作成している。また、給食時には教室を回り、その日の給食について話をしている。保護者の方からの話では、子どもたちは給食時間で聞いたことを家庭でも話しているようなので、おうちの人にも知ってもらいたいと思う内容の話などもしていくようにして、家庭の中で食について話す機会が増える環境を作っていけたらと考えている。さらに、食育の集大成として、6年生では献立をたてるという取組をしている。その中には、とても立派なものもたくさんあり、実際に給食でも実施しているため、食について考える力はついていると思っているのが、中学生になったときに実践として生かされていないのは残念である。

○子どもをみていると、高学年になるにしたがって「学校へ行きたくない」と言うことが少なくなる。今の給食は私たちの子どもの頃からは考えられないような、世界各国の料理やカミカミ献立など、親の私たちが食べたくなるような献立がたくさんある。ただ、給食の話をしていただくという点では、5校のうち3校しか栄養教諭がおられないということだが、どのように他2校へ指導をされているのか気になる。

○栄養教諭のいない2校については、担当を決めて順次指導に訪問する。また、6年生の献立作成の時やお楽しみ給食の時などは、全員で出向いて指導する。ただ、5校あるうち3校しか栄養教諭など専門職のものがいないので、配置のない学校では担任から指導をうけることもあり、専門的な内容の話では担任の口から聞くのと、栄養教諭から聞くのとでは、子どもたちの受け取り方が変わってくるのではと考える。

○栄養教諭が配置されている学校では、年間の教育計画に栄養教諭が位置付けられ、6年間でどのように成長していくかということも計画されるが、訪問して指導をされている学校では、なかなか同じようには進めていくことはできないというのが現状である。

○栄養教諭が配置された当初は、なかなか受け入れられなかったが、今では、精華台小学校はもちろん、

他の小学校でも栄養教諭の存在が定着しつつあると感じている。また、指導については、1年生から6年生まで年間指導計画をたて、5校とも指導していただいている。また、中学校へも精華町としての食の年間指導計画を提案している。しかし、もっと栄養教諭や栄養職員が配置されていれば、子どもたちに多くの話ができ、中学校へも出向いて指導することも可能ではないかと考える。

2. 小中連携した食育の指導について

○中学校へ出向くことができていないということに関して、時間がないということなのか、または中学校側の受け入れ措置ができていないということなのか、どのように理解すればよいか。

⇒措置がとれていないというよりも、こちらからも発信していないということにも問題があると考えられる。たとえば、笠置中学校では、昨年度から学校給食が始まっているが、それ以前から中学校からの依頼で小学校の栄養教諭が食育指導を行っているという実績がある。

○本日いただいている資料2の中にB中学校やC中学校において小中9年間をとおして食に関するワークシートを各担任が実施するとあるが、これは小中一貫でワークシートをつくっているということであるか。

⇒こちらは相楽地方のある市で実施されており、センター給食で幼稚園から中学校まで給食を実施されている中で、19日の食育の日の朝学習の時間に食に関するワークシートを実施していると聞いている。

○小学校で学んだことを中学校でこのようにワークシートを通して指導することも可能であるということであるが、中学校側からの意見として、小学生が中学生として入ってきて、どのような課題があると考えているか。

○小学校では盛んに食育をされているということであるが、小学校では知識を養い、中学校では実践力を養うということができないのではないかと考える。それは給食でなくてもよいのではないかと考えている。たとえば、中学校では部活動が始まるので、部活動での体づくりのために小学校での知識を発展させていけるのかというところで、栄養教諭との連携の中で自分の体づくりという視点で実際に実践していくという取組もできるのではないかと考える。また、保健体育の中でも食生活ということで、体育教師が指導する場面でも連携してより学習を深めることができる。中学生の出口は進路であるため、学習への効果ということも視野に入れて指導していくことも大事であると考えられる。このように働きかけを進めていくことで、子どもたちも多くは食について考えてくれるようになるのではないかと考える。さらに、家庭科の調理実習は実践する機会である。また家庭での取組も大事であるので、PTAの講演会などでは食育をテーマに設定することもできるのではないかと考える。連携を積極的に図っていくということであれば、教科の中や行事の中などでも考えていけるのではないかと考える。その中で、中学生では、自分たちの実際の体づくりの実践力をつけていくという視点での食育がよいのではないかと考える。

3. 中学生の実態について

○中学校の実態として食育の年間計画が整備され、それにもとづいて取り組む努力はしているが、実際

のところ、子どもたちをみていると、学年が上がるにしたがって朝ご飯を食べていない生徒が多くなるという実態があり、そこに一つの課題がある。塾通いのため就寝時間が遅くなることから、起床時間の遅れ、朝食欠食につながっている。また、朝食を食べている子の中でも1人で食べているという生徒が半数を占めており、子どもの食育を考える上で生活面の指導と大きく関連していると考え。そこで、食育の年間計画を立てて指導していく一方で日常生活にも指導を入れて合わせて指導する必要があると感じている。

○中学生のお弁当の中身を見て、感じておられることなど意見はあるか。

○本校の子どもたちは、ほとんどがお弁当を持参していて、中身も豊富でにぎやかなものが多い。小さいお弁当やかわいらしいお弁当などがある。

○今の子どもたちは、食に関わらず生活リズムそのものが乱れてきているように思う。今講座などで人気を集めているものに「男の料理教室」がある。団塊の世代が退職して参加する人が多く、家庭でも男性の食への関わりが大きくなっている中で、このような家庭の様子、両親の様子としてプラスになってくれればと思うところである。また、女子生徒でいうと、先ほど「かわいらしい弁当」という話があったが、やせ願望から小さいお弁当を持参する子が増えている。また、男子生徒では部活動のために2倍以上の量のお弁当を持ってきているという状況を見ていると、個々の希望を親に話してそのようなお弁当を作ってもらっていると想像できる。他にも、食の安全性や伝統食なども加えて大事にしてほしいところである。

○中学2年生を対象にした国のデータでは、女子の16%がエネルギー摂取不足といわれている。女子の中では小学校高学年ぐらいから生理が始まるが、その中で必要な栄養がとれていないことが問題になっている。家庭からもってくるお弁当になると子どものわがままで量を減らしてしまうことになるが、親の愛情という意味でとらえると難しくなる。やせ願望という話がでたが、先ほど出ていた「かわいらしいお弁当」というところではどうように感じているか。

⇒確かに、小さいお弁当のものでは、食べる量は少ないと感じる。

○前回の懇談会でも、小さいお弁当を持参している生徒は給食になると食べきれずに残食が増えるという話が出ていたが、実際にお子さんがおられるPTAの方から見てどう感じているか。また、食に対して問題など感じていることはあるか。

○私の子どもは小学生と中学生の男の子二人なので、食べる量が少ないと感じることはない。食育に関しては、小学校では、毎月19日の食育の日に朝食チェックをするが、その日はとくに、赤、黄、緑の食品が入っているか意識しながら食べている。親もその日は栄養バランスに気を付けて作っている。中学校でも、調理実習など食育もしていただいているが、やはり中学生の息子をみていると食に対する意識はうすれてきているように思う。朝食を食べるときは、親の方も忙しく個々に食べることが多くなってしまいう中で、中学生の子どもはだんだん寝る時間が遅くなってきて、朝が起きられず朝ご飯が食べにくい様子がみられる。少しでも食べていくようには声をかけているが、恥ずかしながら1人で食べてい

るという状況である。またお弁当についても、量に関して問題はないが、嗜好の面で問題はある。苦手なものを入れると残して帰ってくるので、つい好きなものを入れてしまいがちになる。揚げ物やお肉ばかり、いつも同じものばかりになってしまい、茶色い弁当と言われる。

○私は食生活改善委員をしているが、3人の子育てをしてきた。家庭の中で、朝起きて眠たくても時間がなくても朝ご飯を食べていくものであるという形になっていけば、子どもたちも食べるのが当然になるが、最近は親も子も忙しいという中で、このような家族の形が作りにくくなっているように思う。小学校の間は給食を通じて栄養教諭の方などから話を聞く機会もあるが、中学校に入るとどうしても勉強中心になってしまうので、みんなが栄養のあるものを食べることができて、体力もつけることができるということを考えると給食もあると思う。しかしながら、親の愛情を受けてこそ心の成長があると思っていることもあり、給食にもろ手を挙げて賛成とういわけではない。しかし、様々な家庭の事情、実践力や体力をつけていくということを考えれば、やはり中学校でも給食を実施し、給食をとおしてつながった食育というものができればよいのかと、みなさんの意見を聞き、感じているところである。

○お弁当で親の愛情をうけるという話がでたが、中学校の現場の視点として、お弁当は心を養う大切なものであると感じている。中学生は反抗期の子も出てきて、親との会話も少なくなりがちであるが、これは自立の成長の過程であって親と離れようとしているわけではない。その中で、弁当で愛情確認をしているところもあるのではないかと感じる。そのため、弁当は親と子のつなぎとして大切なものであると考える。また、食の実践力というところで、給食であれば給食に依存してしまうのではないかという気がしている。小学校で培った知識を中学校ではさまざまな違った分野で応用していくというのも実践力ではないかと思う。

4. 精華町にふさわしい食のあり方について

○中学校や高等学校でも食の自立が図られていく中で、自分で食を選択する場面が増えてくるが、その中で食の実践力をどのように養っていくかということは大きな課題であると考えます。お弁当のメリットデメリット、給食のメリットデメリットとそれぞれあるとは思いますが、ここからは精華町の中学生の昼食のあり方はどのようにしていけばよいのかについて検討していきたい。

○小学校では、朝も時間があるので朝食を食べ、給食でしっかり栄養を取って過ごしているが、中学校に入ると塾通いで夜遅く、朝食もきちんと食べられない。また、お弁当もやせ願望から小さいものを親に頼んで作ってもらう。また、親がきちんと必要量を考えたお弁当をもっていかせることができればよいが、なかなか子どもはいうことをきかないということなので、中学生の食のバランスが乱れていると思う。給食であれば、ある程度の配分もされるので一定の栄養の確保ができるという点でも給食の効果があるのではないかと思う。しかし、親の愛情もどこかで感じてもらうことのできる工夫をしなければいけない。また、自分の生まれ育った地域の特産物を知っておくことは大事であると考えるので、小学校から引き続いて地場産物を知る機会にもなるため、この点でも給食の効果は大きいと思う。

○15、6歳の子どもの4割以上は歯肉炎というデータもあるが、これは野菜の摂取不足による咀嚼力

の低下にある。虫歯は減ってきているが、歯周病にかかっている中学生が増えている。健康面でもさまざまな問題がでてくる中で学校給食の位置づけというものがあるのではないかと考える。

○給食の良さ、弁当の良さそれぞれあるが、私自身は給食のない中学校でしか経験がないので、給食についてはわからないことが多い。以前いた学校でも給食を検討する会があり、給食を実施されている京都市、大阪府に視察に伺ったことがあった。京都市ではデリバリー方式でやっていたが、注文弁当の生徒と自分のお弁当の生徒は半分ずつぐらいで、和気あいあいと食べており、さらに食育も積極的にされ、生徒指導上の問題もクリアされて給食を実施されている学校であった。大阪の方では自校で給食を弁当タイプの容器に配膳をして各教室にもっていくという方式であった。どのような形であってもそれぞれに課題があり難しい問題ではあるが、精華町では今までお弁当であったことで、食育について少し停滞していることがこれからの課題であると感じる。

○子どものことと親の負担のことを考えると、給食がよいのではないかと思う。食育は、弁当であっても給食であってもやっていただけるものと思っているが、給食の方が、やり方によってはいろいろな指導ができると思う。ただ、京都市が実施している弁当の選択方式というものは、小学校給食で実施している給食費補助金等のことを考えても精華町には好ましくないと思う。

○食育というのは、弁当ではできなくて給食しかできないという定義ではない。また、小学校と中学校では食に対する切り口が違う。弁当であっても給食であっても、どれだけ栄養豊富な食事であっても食べなければ意味がない。やせ願望や偏食から食べないということでは、弁当であるか給食であるかが問題ではなく学校での指導、家庭の役割が問題になってくる。さらに、どのような給食の方式にするかについて、配膳方式であるか弁当方式であるかで時間も変わってくるので、そのこともあわせて検討していかなければいけないと思う。

5. 今後の課題について

○小学校と中学校の発達段階の違い、生徒指導上の問題の違いが関係しているのかと思いながら、体のことについてみなさんの意見を聞いていた。中学校では、体のことを考えるときに、すこやかな体を阻害するような指導、たとえば、たばこの指導、薬物の指導に重きを置いて指導してきた。その理由には、お弁当を家からもってくるということで、栄養の問題は学校で指導しなくてもよい、残食の問題を指導しなくてもよいということで、逆にいえば家庭の問題として流してきたところがあるのではないかと思う。体のことが問題になってきている中で、中学校も食のことについて考えるべきである。給食がないために食について直接学校で指導する場面がなかったということが、食育の問題を家庭にまかせてきた大きな要因になっている。恵まれた家庭環境で子どもたちが中学生になり、学校で食について指導しなくても支障なく、家庭にまかせておけばよいという学校側の甘えがあったのではないかと思う。

○近頃生まれてくる赤ちゃんの1割が低出生体重児といわれているのは、将来母親になる女の子たちが、10代の骨を作らなければいけない時期に、ダイエットをすることによっておこる骨盤の発達の遅れが原因といわれている。そして、未熟児として生まれた子どもは、将来生活習慣病にかかりやすい体質にな

るということもわかってきている。また、自分自身も将来骨粗しょう症になる確率も高くなる。思春期の間に、栄養不足が将来自分の子どもにまで影響を及ぼすことになるという教育を行っていくことが大事であると考えている。

○給食は給食の良さがあり、弁当は弁当の良さがあると思っているが、給食において、中学校の先生方がどのくらい知っておられるのかが気になった。本校の教頭が中学校から来られた先生で、給食のことをよく知らなかった。中学校給食が実施されているところから精華町に来られた場合はよいが、中学校の先生方の実態として実際どのくらい給食について知っているかを考えると、もっと給食について知っていただくのもこの懇談会を進めていく上で必要なことであると思う。しかしながら、一番大事なことは、給食であっても弁当であっても中学生として食についての実践力を身につけるように指導していくことと思う。

○近隣の笠置中学校や泉川中学校で給食が始まったときには、給食のない学校でしか赴任されたことのない先生方は給食に戸惑われたという話も聞いている。生徒たちは、小学校で給食を経験してきているため、特に1年生などは問題なく進めることができるが、2年、3年になると多少忘れていた部分もあるので、担任教師が大変であるという思いをもっておられると考える。実際時間のない中で、子どもたちにどのように指導するかを考えると大変だとは思いますが、給食について知らないから余計に大変だというイメージを持たれてしまうという話も聞いている。ただ、栄養教諭としても中学校に何も発信できていなかったと感じている。部活の試合前や体力作りの食事のこと、貧血にならないための食事のことなど、伝えていくことはあまりできていなかったが、給食がないことでなかなか踏み入ることができないと思っていたところもある。しかし、中学生になると部活動などでさらに自分に直面している問題として、スポーツ栄養の話など食の指導に切り込んでいけるのではと考えている。

○お弁当の中学校では、先生方の昼食はどうされていますか。

⇒各自でお弁当をもってきたり、あっせん弁当を注文したりしています。

○昼食は生徒と一緒に食べるのですか。

⇒昼食指導として教室で食べます。

○給食のない学校の職員室ではコンビニ弁当を食べているなど先生の食生活も乱れているという話も聞きますが。

⇒教師もローテーションをしながら教室で食べていますが、やはり時間がないので、指導が難しいです。

○私たちが給食を実施している中で感じることは、担任の姿勢が生徒たちに大きく影響するという点である。そのため、教師の言葉があるかないかで、同じ学年であってもクラスによって全然残食量が違う。また、給食と弁当の対立ということではなく、お弁当のよさをどのように残していくかも考えていく必要もある。たとえば、先ほどの話にもありました19日の食育の日には、お弁当にするとか、場合によってはその日は自分でお弁当を作ってくるというような取組を残しつつ給食を実施するのも一つの方法である。精華町でどのような子どもを育てていきたいかを考えた上で食のあり方を形作っていくことがよいのではないかと考える。さらに、小学校でやってきたことをどのようにして中学校につなげ

ていくのかということを考えていかないといけない。食育というのは、栄養教諭1人でできるものではないので、他の教師の意識をどのように高めていくのかということも課題となる。

○小学校の教師が考えている給食のイメージと中学校の教師が考えている給食のイメージでは大きな差があるということがわかった。また、前回に給食の課題として提示された残食の問題、時間の問題、給食費の問題については、今回教育委員会が提出した資料から、近隣の中学校では大きな課題としていないということもわかった。これからは、この給食のイメージの差をどのようにして埋めていくかが課題の一つになってくる。給食か弁当かという2つで考えた時には難しいことではあるが、いずれにしてもどちらかの方向に進めなければいけないということなので、もうすこし議論を進め、精華町にふさわしい食のあり方を考えていかなければいけない。

○前回は給食は全食事の1割にも満たないという話がでたが、食育の基本は家庭にある。そのため、お弁当だけに愛情が表現されるものではなく、朝ご飯にも夕ご飯にも日常的に表現されるものである。その中のひとつとしてお弁当が入ってくる。子どもたちの食の実践力ということ考えた時に、いかに子どもの食の世界を豊かにするかというところで、基本である家庭を巻き込むような食育を学校の方からも発信していくことが大切である。今は便利な時代であり、親が関わらない生活が増えてきている中で、食卓というものは、子どもの心の発達、または子どもの様子をうかがうために重要な場所であり、また保護者の方にもそのような意識をもっていただけるように働きかけることが大事である。中学校では男女の性差が表れてきて、体質や栄養というものが変わってくる中で、どのようにして食の自立をしていけるかという食の実践力をつけることが課題になってくる。さらに家庭を巻き込み、教員全体が食に対する意識を高めていく中で、心も体も健康な子どもたちを作っていくことを考えていきたい。次回は給食を実施するならばどのような形であるのがよいか、またお弁当のもっているメリットを生かす方法などを含めて議論していきたい。

3. 次回の懇談会について

○現在の小学校の食育では、給食をとおして充実した指導を継続して続けていただくとともに、この実績を今後どのように中学校へつなげていくかという視点も大事にしながら考えていきたい。この懇談会では子どもの食のあり方を検討することなので、子どもにとってどうすることがよいかを一番に考え、その上で教員の意識を高めていくということについても議論していきたい。また、給食を実施するならばどのような方式がよいかなど、運営方法についても話し合っていきたい。さらに、お弁当の意義についても大きいものであるので、どのように生かしていくかも考え、精華町が自慢できる給食のあり方というものにつなげていきたい。